

母子世帯支えるシェアハウス

コロナ禍で仕事や住まいの確保に悩む女性を対象にしたシェアハウスが増えてきている。とりわけ子どもを一人で養い、孤立しがちなシングルマザーには共同生活を通じて家事や育児の協力が得やすく、家賃も抑えられる利点がある。運営する民間事業者が生活をサポートする取り組みもある。(辻阪光平)

「きょうのおかずは少し辛めかも」「かなり辛いって。でもおいしいよ」。共用の台所はにぎやかだ。

神戸市長田区の「インターナショナルシェアハウス シトラス」。市内で共有オフィスなどを運営する「マチアケ」が、2階建て民家を改装し、昨年4月に開設した。

母子世帯と单身女性を対象に個室4室を貸し、トイレや洗濯機、おもちゃを備えたキッズルームは共用。家賃は月2万6000円〜3万2000円で、单身女性(27)と中国人留学生(26)、母子3人の3世帯5人が暮らす。時間が合えば一緒に食卓を



一緒に食事を楽しむ「インターナショナルシェアハウス シトラス」の入居者(神戸市長田区で)

囲む。この日は留学生が夕食にいたため物をつくった。6歳と4歳の2児を抱えて今年5月に入居した母親(32)は「ワンオペの家事や育児がつらい時もあったが、ここでは料理や買い物の際に子どもの面倒を見てもらえる。体調不良の時も安心できる」とほほ笑む。

母親は約2年前、夫の元を離れ、子連れで実家へ。英会話教室の講師として働いていたが、コロナ禍で生徒が集まらず、10万〜15万円あった月収も減少した。起業を目指し、シトラスに飛び込んだ。生活に慣れるまでは働かず、貯金を崩すつもりだった

孤立防ぐ * 家事・育児協力 * 家賃抑える

●セーフティネット住宅情報提供システム
<https://www.safetynet-jutaku.jp/guest/index.php>
 「住宅セーフティネット制度」の登録物件を検索・閲覧できる

●マザーポート
<https://motherport.net/>
 主にシングルマザー向けのシェアハウスを紹介

●住まいの確保に悩む女性向けの物件情報サイト

が、マチアケ代表の玉井美里さん(33)が、同社の物件管理業務を委託するかたちで仕事を提供。働く時間を調整しやすく、育児と両立できている。母親は「自立したくても、低収入や無職だと一般の家賃物件は借りづらい。こういう住まいの場がもっと増えてほしい」と話す。

NPO法人「全国ひとり親居住支援機構」は、運営するサイト「マザーポート」で母子世帯向けのシェアハウスなど全国の約30軒を案内している。物件の一つ、京都市伏見区の「ココハウス石田」(4室)は7月にオープンした。

入居対象は家庭の事情を抱える未成年や賃貸契約が難しい高齢の女性も含む。母子家庭で育ったという管理者の竹本よりさん(50)は自ら訪問し、夕食をつくる支援を提案している。「母は毎日忙しく、幼い頃は遅い夕食を待つのがつらかった。ご飯を支度する人がいれば、少しは生活も楽になるはず」と説明する。

公営住宅 活用動きも

コロナ禍が雇用や生活に与えた影響は非正規雇用者が職を失うなど、立場の弱い女性に強く表れている。無職を理由に賃貸住宅への入居を断られるケースも目立ち、国や自治体が支援に乗り出している。

準を新設。1部屋に1人の入居に限定していたシェアハウスに、ひとり親世帯も入居できるようにした。家主らは登録に必要な改修費の補助を受けられる。

公営住宅を活用する動きもある。群馬県は2019年から、前橋市内の県営住



になれば」と語る。

大阪府営住宅でも9月、保証人がおらず、仕事や住む家がない10〜20代女性や母子世帯向けのシェアハウスが茨木市内に開設された。写真は、3LDKの一室を不動産会社「アドミリ」(兵庫県尼崎市)が借り受けて運営。茨木市と連携して入居者の生活支援に取り組んでいる社会福祉士の辻